

## 日本は「桜」、ハンガリーは「プライベートジェット」

盛田 常夫

### 権力は魔物

一つの政権が長く続くと、いろいろな弊害が露呈する。権力者は自分のおかれた立場を錯覚し、あたかも「王様」になったかのように振る舞う。いったん「王様」の気分を味わった政治家は、その麻薬的な魅力からなかなか抜け出すことができない。王の回りに集まる者は王のご機嫌を伺い、重用されるように取り入り、忖度することに精を出すようになる。何時の時代にも、王宮が腐敗する構造である。

これは何も政治家だけでなく、会社経営者もまた、同族経営の場合に、「王様」的な絶対者の立場を乱用する。頂点に立ち、すべての者を従えることができる立場は「王様の気分」である。だから権力者はなるべき長く、頂点に居座っていたいと思うようになる。政治家であれ経営者であれ、「世俗の王」になることが究極の理想である。安倍晋三が政治評論家から首相としての目標を聞かれて、「なるべく長く政権を維持すること」と答えたことは、このことを如実に示している。政治理念より大切なことは、自らが可能な限り頂点の座に居続けることなのである。

政治権力は「権威」であるだけでなく、公金の処分権でもある。日本では発展途上国のように国のお金をあからさまに私財に転換することは難しいが、それでも官邸機密費という用途が限定されていない公金が数百億円規模で確保されている。領収書が不要なお金は使い勝手が良い。領収書が必要な場合でも、晩餐会費用の一部をプールさせ、個人的な行事に転用することにもできる。それが「桜を見る会」の問題なのだ。

日本では新聞社の政治デスクが首相や主要閣僚と定期的に会食している。権力に飼い慣らされたメディアの矛先が鈍るのも当然のことである。定期的にクリスマス会とか新年会や食事会をやっていて、批判的な記事が書けるわけがない。

ハンガリーの場合はもっと露骨に国家財政が私物化される。政権が公共放送を牛耳っているから、政権政党に不都合なニュースは流されない。それを良いことに、実に様々な公金横領、背任行為が公然と行われている。ハンガリー検察は政権の守護神に化している。

### 「桜を見る会」問題の本質

「桜を見る会」の問題がメディアで報道された時に、アベノヨイショで知られる高橋洋一は、「予算から見れば端金だから、問題にならない」という擁護論を展開していた。「政府の累積赤字はなんら問題ない」と発信している高橋は、ここでも的外れな議論でアベノヨイショを展開している。「桜を見る会」や「安倍後援会のパーティ」の予算が大きいとか小さいとかという問題ではない。自らの権力基盤の強化のために公金を使うという問題である。この種の公金横流しや横領が「桜を見る会」だけに留まらず、日常茶飯に起きていることから問題なのだ。

何ごとに付けても、安倍政権に忖度する高橋洋一だが、その割になかなか甘い汁にありつけない。窃盗や盗作でいろいろ脛に傷のある御仁だから、権力をバックにしていた方が安心なのだろう。高橋が無署名で「週刊現代」の記事を書いていることはあまり知られていないが、ちやほやされる編集部に取り入って、つまらない記事を書いている。講談社は、「日刊ゲンダイ」で安倍政権を批判し、他方で「週刊現代」でアベノヨイショしている。こうやって帳尻を合わせているということか。

リオ五輪の閉会式で、安倍首相がスーパーマリオに変身して登場した企画に、10億円以上のお金がつぎ込まれた。財政赤字で増税が必至な状況なのに、こんな企画にお金を使っていたのではいくらお金があっても足りない。世界のほとんどの人は、日本の首相の名前や顔などを知らない。日本人がイギリスやフランスの首相の名前や顔を知らないのと同じだ。急に変な叔父さんのスーパーマリオが出てきて、日本人以外には何が何だか分からなかったが、この企画は世界に向けたものではなく、日本向けの人気取り企画。こんなアベノヨイショ企画に10億円も使うのはどうかしている。公金の私的流用である。

要するに、安倍首相の金銭感覚はこの程度である。使い切れないほどある官邸機密費から、ホテルや料亭の会食、トランプ大統領のゴルフ接待のために湯水のように支出されている。安倍首相の頭には、日本の財政問題などこれっぽっちもない。国の財政など何とでもなると思っているから、口から出任せに、「今後10年、消費増税は不要」などと言ってしまう。「将来の日本などどうでも良い、自分の政権がなるべく長く続くことが一番」なのである。

付属学校を大学までスカレートで上がった人物だから、社会的知性の偏差値は極めて低い。それは漢字が読めない財務大臣も同じこと。この二人は語学学校しか通っていないのに、「南カルフォルニア大学政治学科卒業」とか、「ロンドン経済大学卒業」などの学歴詐称で、有権者を欺こうとした。政治家の経歴詐称が話題になった途端に、この経歴はHPから削除された。この二人には学歴コンプレックスがある。だから、東大卒の官僚を従えることに優越感を感じている。晋三少年は小学生時代の家庭教師だった平沢勝栄（東大法学部卒、衆議院議員）に、覚えが悪くて定規で頭を叩かれた記憶が残っているから、なおさらエリートへの感情的な反発が消えない。麻生も漢字が読めないことを囃し立てた新聞を目の敵にしている。だから、権力の座に就いた途端に新聞記者に威張り散らしている。

「懇切丁寧な説明に努める」と言いながら、「私は承知していない」、「担当部局は適切に処理していると聞いている」、「そういう見方は当たらない」、「すでに資料は廃棄されており、知る手立てがない」、「担当部局に聞いていただくのが適切」と逃げ回る官房長官も、苦学生だと評価されているが、ろくに大学で勉強もせずに政治家の書生になった人物だ。政治派閥を渡り歩いてきた根っからの政治屋である。

こういう人物が日本を支配し、多くの国民がそれを「良し」としている。要するに、国民の平均的知性が、今の内閣の平均知性以下だと見透かされているから、官邸のやり放題なのだ。これでは将来日本が思いやられる。

## 犯罪を隠蔽する権力

権力の周辺にはいろいろな人物が纏わり付いてくる。アベノヨイショのエコノミストたちは立身出世のためにアベノミクスを礼賛し、政府の要職に就くか、メディアでちやほやされてきた。権力者は「来る者は拒まず」で、素性が怪しい人物まで抱き込んで権力基盤を固めようとする。しかも、ボンボン宰相だから、社会を知らず、人を見る目がない。だから、有象無象が集り、それを自分の人気の高さだと錯覚する。

アベノヨイショ本『総理』(幻冬舎、2016年)で安倍内閣に取り入った山口敬之などは、その最たるものである。安倍内閣誕生に力を貸してもらったお礼にと、菅官房長官から種々の会社顧問の職を紹介してもらい飯の種を確保しただけではない。ヴェンチャー企業「ペジーコンピュータ」の顧問になり、月額200万円はするというキャピタル東急ホテルのレジデンスの提供を受け、顧問料として月額200万円を取得していた。官邸に顔が利く山口を顧問にしたのは、政府の助成金取得のためである。このペジーコンピュータは政府の補助金など、100億円近い公金を取得していたが、2017年暮れに助成金詐取で社長他幹部が逮捕された。山口も同罪なはずだが、この件で彼は逮捕されていない。

その山口にたいする伊藤詩織さん準強姦容疑逮捕(2015年)が警察庁刑事部長中村格の指示で、逮捕直前に取り消された。中村格は菅官房長官の元秘書官である。「週刊新潮」が暴露したように、山口は官邸に助けを求めた。逮捕が取り消されただけでなく、刑事告訴が見送られたのは、官邸との関係が深いからだろう。

検察審査会で山口不起訴が決定した時、ネット配信番組(2017年)で、山口を囲んで不起訴を祝って乾杯した人物がいる。加計学園客員教授のタイトルをもらって安倍政権に寄生している上念司、「日本維新の会」足立康史衆議院議員と自民党の和田政宗参議院議員だ。自民党の杉田水脈衆議院議員も、「枕営業」だと騒いだ連中だ。こういう下衆(ゲス)な連中が山口を鼓舞している。ところが、民事訴訟で山口が負けた途端に、勝ち目のないことが分かり、逆にセカンドレイプで告訴される可能性が出てきたために、手のひら返しで退散を表明した。計算高い連中だ。山口がゲス野郎なら、この連中も同類だ。それに比べれば、同じ右派の論客でも百田尚樹ははるかに増しだ。山口敗訴について、「きわめて下品な事件。意識のない女性と性行為して何が良い」と暗に山口を批判している。これがふつうの感覚だろう。

レイプドラッグを使った可能性が高いとみられているが、民事判決で全面敗訴しても、「私は法を犯していない」と上告した山口は、まだ官邸のアシストを計算しているだろう。いつまでも安倍内閣が続くわけではないし、官邸と山口との不可解な関係が、週刊新潮で連続的に暴露されている。億を超える山口の反訴は、濡れ手に粟の顧問料を失ったからだが、当然の報いである。こんなゲス野郎が大手を振って歩けるような日本であってはならない。

## ジェット旅行が大好きなオルバン首相

日本で「桜」が満開なら、ハンガリーでは「プライヴェットジェット」が時の話題。ただ

し、ハンガリーの公共メディアは権力の監視下にあるために、政権に傷が付くニュースは一切報道しない。現在のハンガリーでは反政府メディアの暴露記事だけが、政権の腐敗を知る情報源になっている。

オルバン首相はEUの会議に出向く際に、飛行機を使わず、ナップザックを担いで国際列車に乗り込む写真を公表し、いかに「清貧」甘んじているかを喧伝していた。しかし何のことはない、それはたんなるポーズに過ぎなかった。

W杯ロシア大会を観戦するために、政府補助金を受けている企業が保有しているプライベートジェットで移動した。「友人の好意を受けて何が悪い」という一言で、国会の質疑は終わり。政権政党が議席の三分の二を抑えているハンガリー国会は何とも情けない。

最近になって、国防省保有の小型ジェットが不可解な都市に飛行していることが反政府メディアで暴露された。

2018年にハンガリー国防省はAirbus A319を購入し、さらに中・長距離ビジネスジェットであるダッソーファルコン7X(Dassault Falcon 7X)を購入した。購入に際して、国防大臣は「この機体は政府専用機ではなく、国防省の業務のために購入されたもので、国防省が使用する」と述べたにもかかわらず、オルバン首相やその周辺の人物が頻繁に利用していることが暴露された。

オルバン首相が公式訪問に使用するのはやむ得ないとしても、この機体が公式行事以外の私的な旅行に使われているという疑惑が浮上してきた。国防省は飛行経路を秘匿し、公表を差し止めてきたが、反政府メディアが入手した記録によれば、カナリー諸島、ラスベガス、ドゥバイ、マルタ、パナマなど国防省の業務とは無関係な行楽地やタックスヘイヴン地に飛行していることが明らかになった。明らかに私的な旅行への使用である。しかし、国防省はこの飛行に誰が搭乗していたかは国家機密として、公表することを拒否している。現在のハンガリーではプライベートジェットの私的流用が政治的な問題になることはない。国防省が情報公開を拒否する限り、政治家は安泰なのだ。

### セックスキャンダル

ハンガリーにも山口敬之のようなゲス野郎がいる。ボルカイ元ジュール市市長、ジュール市の利権を牛耳っている実業家たちである。彼らが2018年夏に、アドリア海でヨットを貸し切り、クロアチアの若い女性6名を乗せて乱交したビデオ映像が、昨秋(2019年10月)の地方選挙中にネットで配信された。FIDESZ首脳は慌てて立候補取下げを進言したが、オルバン首相は市長選からの撤退を容認しなかったために、ブダペストを含む主要都市で政権党が敗北を喫した。

この事件は破廉恥だというだけの問題ではない。このような豪遊の背景にあるのが、ジュール市の利権独占の腐敗である。乱交旅行を組織した弁護士で実業家ラーコシファルヴィはボルカイ市長と組んで、AUDI工場に隣接する農業地を二束三文で買い取り、その後いったんオフショア企業(自らが設立)に転売する形をとった。その間にジュール市は市長のイ

ニシアティヴで農業用地を工業用地に転用可能な法的整備を行い、それが成立したところで、AUDI にロジスティックセンター用地として売却した。二束三文の土地が 40 億 Ft を超える金の卵になった。

本来であれば、ハンガリー検察当局はセックススキャンダルの背景にあるジュール市の腐敗を捜査すべきであるが、検事総長ポルトはラーコシファルヴィとバラトン湖畔の高級別荘マンション隣組なのだ。だから、捜査は腐敗・汚職捜査ではなく、セックスビデオを暴露し、ボルカイ市長個人の名誉を毀損した人物の捜査になっている。

オルバン首相によって検事総長に就任したポルトは FIDESZ 政権の守護神であるだけでなく、オルバン一家の諸護神でもある。オルバンの女婿ティボルツ・イシュトヴァーンによる EU 補助金詐取事件は、政府が EU 補助金を返済する結末を迎えたが、ハンガリー検察は EU 会計監査院の捜査依頼にたいし、ほとんど何もしなかった。ティボルツが詐取した巨額の補助金はハンガリーの国家予算から補填され、ティボルツは無一文状態から起業資金を手にしたのである。

かくように、日本でもハンガリーでも、権力は犯罪を隠蔽し、犯罪者を庇護するのである。あらゆる権力は腐敗する。安倍政権もオルバン政権も、同じ道を歩んでいる。

(2020 年 1 月、一部加筆修正)